

- キク産地である中部管内において、近年、クロゲハナアザミウマによるキクの加害が問題となっており、農薬防除効果は高い害虫であるにもかかわらず、生産者ほ場では被害が拡大していた。
- このため、中部農業改良普及センターでは、効果的な防除方法の検討のため、感水紙を利用した防除実演会を実施するとともに、クロゲハナアザミウマ防除チェックリストの作成や、IRACコードを活用した農薬リストを活用した指導を行った。
- その結果、農薬散布方法について生産者の認識が深まり、防除に関する意識が向上し、防除実演会が県内各地に波及していった。

具体的な成果

1 生産者の認識を改善

■生産者はアザミウマ対策として農薬散布を行うが、効果があがらず、「農薬が効かない」という認識を持っていた。



図1 講習会

講習会、巡回指導等で定期散布の重要性や農薬がかかれば防除効果は高いことを指導していった。

2 感水紙の利用による散布効果の確認

■防除実演会において生産者自身で普段どおりの方法で水を散布し、散布後の感水紙を掲示し、評価し合った。



図2 結果の確認

これにより、虫のいる葉裏に農薬がかかっていないことを客観的に確認することができ、自身の防除方法を見直すきっかけになった。

3 波及効果

■中部管内での防除実演会の実施をきっかけに、県内各地で同様の取組みが実施された。

■県内各地において、農薬散布だけでなく、栽植密度の検討など耕種的防除の組み合わせや、ノズルの改良などさまざまな角度からアザミウマ防除の取組みが始まった。

普及指導員の活動

平成26年～27年

- 沖縄県花き技術者連絡協議会アザミウマ対策チームとして、現地調査の実施。
- A市花卉産地協議会と連携してトラップ調査の実施。

平成28年

- 普及だより、講習会、巡回指導等で、防除ポイントの指導。
- 普及が中心となり、管内農業青年クラブと連携し、生産者、市町村、農業研究センター、農機具メーカーを交え、生産者ほ場で感水紙を利用した防除実演会を実施。

平成29年

- アザミウマ防除チェックリストやIRACコードを活用した農薬散布を講習会、実演会等で提案。
- A市花卉産地協議会に働きかけ、防除実演会を実施。

普及指導員だからできたこと

・普及が働きかけ、関係機関の連携を促したことで、多面的にクロゲハナアザミウマ対策の取組みがはじまった。

・管内の成果だけでなく、普及間の連携により他地区での実演会の成果などを管内外の生産者と共有でき、県内全域に防除に関する認識を深めることができた。

キク害虫防除技術改善取組の拡大

活動期間：平成 26 年度～（継続中）

1. 取組の背景

沖縄県は全国的にも有数のキク産地であるが、近年、キク栽培において害虫として認識されていなかったクロゲハナアザミウマによる被害が県内キク産地で目立ちはじめ、対策が求められていた。

クロゲハナアザミウマは、農薬防除効果が高いことは知られていたが、微小昆虫であること、キクの栽植密度が高いことなどもあり、見つけにくく、一度被害を出してしまうと防除が難しいため、中部管内においてもクロゲハナアザミウマ対策は急務となっている。

2. 活動内容（詳細）

（1）平成 26 年～27 年

平成 26 年から沖縄県内の花き関係者で構成される沖縄県花き技術者連絡協議会で「アザミウマ対策プロジェクトチーム」を設置し、中部管内でも現地調査を実施した。管内花卉産地協議会と連携してトラップ調査を実施した。

（2）平成 28 年

中部管内において、普及だよりにアザミウマ防除のポイントを掲載し、キク農家に対し、講習会、巡回指導等で指導を行った。

また、普及が中心となり、管内農業青年クラブと連携し、生産者、市町村、農業研究センター、農機具メーカーを交え、実際のキク圃場で感水紙を利用した防除実演会を実施した。

（3）平成 29 年

普及センターでは、アザミウマ防除資料として、チェックリストや I R A C コードを活用した農薬リストを作成し、講習会、実演会等でキク農家に提案した。

管内花卉産地協議会活動の一環として、市町村、出荷団体に働きかけ、防除実演会を実施した。

3. 具体的な成果（詳細）

（1）生産者の認識を改善

これまでの試験研究の結果から、アザミウマは農薬防除効果が高いことは確認済みだが、生産者はアザミウマ対策として農薬散布を行っても、効

果があがらず、「農薬が効かない」という認識を持っていた。その認識を改めるため、講習会、巡回指導等で定期散布の重要性や農薬がかかれば防除効果は高いことを指導していった(図1)。



図1 講習会

(2) 感水紙の利用による散布効果の確認

防除実演会において、生産者のほ場で、キクのうね上に感水紙を設置した竿を立て、生産者自身で普段どおりの方法で水を散布し、散布後の感水紙を掲示し、評価し合った。これにより、虫のいる葉裏に農薬がかかっていないことを、生産者が客観的に確認することができ、自信の防除方法を見直すきっかけになった(図2、3)。



図2 感水紙



図3 結果の確認

(3) 波及効果

中部管内での防除実演会の実施をきっかけに、平成 29 年度には 7 産地（中部管内含む）において同様の取組みが実施された。

県内各地において、農薬散布だけでなく、栽植密度の検討など耕種的防除の組み合わせや、ノズルの改良などさまざまな角度からアザミウマ防除の取組みが始まった。

4. 農家等からの評価・コメント（管内キク生産者）

感水紙を使った防除実演は、目で見て、農薬散布ができていくかわかるところがよい。IRACコードにも興味があり、こうした取組は続けて欲しい。

5. 普及指導員のコメント

クロゲハナアザミウマは、サイズが小さく、栽植密度の高いキクほ場で、増えると防除は困難である。指導の際には農薬散布だけで防げるわけではなく、初期防除、定期散布の大切さや、耕種的な防除を組み合わせることを強調している。防除実演会をとおして生産者が各自の防除方法や栽培方法を見直すことは、よい結果につながると思う。

（沖縄県中部農業改良普及センター 農業技術班 玉城）

6. 現状・今後の展開等

防除実演会は今後も各地で開催し、事例を積み上げてよりよい防除方法を検討していく。